
クローバー

straightener

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバー

【Nコード】

N7422V

【作者名】

straightener

【あらすじ】

四葉が栄光学院に入学してはや半年が過ぎようとしていた。

四葉

2 x x x 年。ここはとある幼稚園。子供は無邪気に遊具で遊んでいる。どこの誰が見てものどかで平和であると思う情景だろう。まさかあんなことが起こるまでは。

ある日の夕方。日は落ちていく運動を始め、園児たちも親と共に笑顔で帰っていく。四葉も笑って、いつも迎えに来るお母さんと一緒に帰るはずだった。母親の迎えが遅い四葉「しょう」は、いつも先生と門の前で迎えを待っていた。「今日はいつもより遅いね。お母さん。」先生が四葉の肩に手を添えながら言った。「大丈夫。全然平気だから。」四葉は無理に笑顔をこしらえ言った。

すると遠くから軽自動車がちら側に向かってくる。見慣れた自動車だ。「お母さん!!」四葉は肩に置かれた先生の手を振り払い、はるか遠くの赤い車の方へ走っていった。「先生また明日!!」四葉が走りながら振り返り言った。その瞬間、、、。

四葉は肌に熱気を感じた。ものすごく熱い熱気だ。まるで火傷を負ったような。目の前では赤かった車が業火に見舞われ黒くさえ見える。

「四葉くん!! こっち来なさい!」先生は赤黒く燃えさかる火柱を呆然と見つめる幼児をガツと抱え込んだ。目には光がない。5歳児にこの現状が理解できているのだろうか。自分を迎えに来た母親が突然車と共に燃えるようなことを。

先生は四葉を抱えたまま携帯電話を取り出し警察に連絡を入れた。そして四葉を抱っこし園内へ戻った。一刻も早くこの場から離れることが重要だと思ったのであろう。

教室に來た先生は四葉を下ろし、すぐさま園長室へ向かった。園庭に出ると他の先生達も門のそとまで出ていて、ただ燃え盛る車を見

続けていた。

「四葉君の状態は？」血相を変えて園長先生が言った。

「呆然とした感じです。今ゆり組の教室にいます。」

「このことは今園内にいる子供たちには黙っておきましょう。理由が分からない以上、こんままでは幼稚園の信頼にかかわってきてしまいますからね。」

先生が頷くと同時に

ドゴンッ！

大きな物音がゆり組から聞こえた。門まで聞こえる程であるから相当大きな音だ。

「四葉君！？」先生達は全員、音のしたゆり組へ走った。

教室には倒れている無数の子供達。そして、唯一立って直立不動の四葉一人の光景だった。

「し、、、四葉くん？」

四葉の左目には蒼い光が煌々と先生達を照らしていた。

10年後。ここはとある一軒家。

「多田さん。遅くなりました。いやあ、この時期になると残業が多くて多くて。」

「春はガキ共も活気づく頃だからな。しょうがないわ。ほれ、お前もパン食え、乾。」

「アイツはまだ寝てますか。」

乾は多田からのジャムパンを袋から取り出しながら言った。

「ああ。入学式早々、面倒なことおこさんかったらええがなあ。」

多田はコンビニのおにぎりをほおぼり、熱いお茶をすすった。

「、、あれから10年ですね。丁度。」

「だから呼んだんだ。乾、上司の目なんか気にするなよ。わしがいるから大丈夫だ。」

「はは。心強いです。」

乾は椅子から立ち上がり、冷蔵庫から牛乳を取り出した。そのとき、ドドドと二階から一人の少年が学校の制服を着て降りてきた。

「おお、四葉。パン、持って行け。くれぐれも学校で色んなやつにちよっかいなんか出すなよ。」

「、、、。」

四葉は何も言わずパンをがむしゃらに取り家を飛び出すように出て行った。

「、、、行ってしまったね。」

乾は牛乳をラッパ飲みした。

「友達でもできればええがなあ。よし、乾、俺達も作業に移るぞ。」
多田は椅子に掛けてある黄土色のコートをはおい、乾ははいと言って牛乳を直しローファアに足を入れた。

「何が何でも突き止めるんじゃ。あの事件の真相を。」

「はい。」

二人は身なりをシャンツと正し軽自動車に乗った。

ここは栄光学院中学校、通称栄学。正門には春の入学式と書かれた看板がどんと置かれており、次々と生徒が親子連れで体育館へと入っていく。

「では校長先生。時間になりましたので体育館のほうへ。」

「わかった。」

白髪にオールバックの無精ひげで厳格そうな顔つきの男と、黒いスーツお来た細身の男が門から体育館へと向かった。

体育館内は異様な静けさと共にざわざわとしている。

「これより、大22回、栄光学院中学校入学式を行います。」黒のスーツの男が行言った後に、舞台に厳格な顔をした男が姿を現し口を開いた。

「、、ふん。くそ雑魚が。」

四葉は学校近くの駐車場にいた。拳は横たわっている制服を着た少年達の血で赤くなっている。

「弱えくせにメンチきつてくんなくそが。」

四葉は鞆を肩にひょいっと乗せ駐車場を出た。

「ふう。入学式なんて意味ねえよな。めんどくせえ。」

そのとき、遠くから自転車に乗った警察官が四葉を見つけ、

「おい！その少年！待ちなさい！」

四葉はやべっと言い全速力で学校と別方向に走った。

「、、本当に何かあるんですか？こんなところに。」

「必ず何かあるはずだ。黙って探せ。」

「土掘っても証拠なんて出てこないでしょう。」

乾は額の汗をタオルでぬぐった。

「じゃあほかにどこをあたればいいんじゃない。あの園内にいた先生、園児すべて死んだのに。」

多田はスコップを土に突き刺し腰をたたいた。

「でも、すごい事件ですよ。園児、先生全員死んで、残っていたのが四葉たった一人。なにかあるのは間違いないと思うんだけどなあ。」

「その何かを探すんだ。いいか。実はここ立ち入り禁止なんだ。静かに隠密にやるぞ。」

「ええ！そうだったんですかあ。聴いてませんよ。完全に法に違反してるじゃないですかあ。」

「わかったらさっさと探せ。昼になるとこの地域を管轄化にしてる警察が来るからな。昼になれば家に帰って資料分析だ。」

「はあゝい。」

二人はまたスコップで広大な土地を堀り始めた。

すると多田の携帯が鳴り出した。

「はい。はい。、ええ！、、わかりました。行きます。」

「多田さんどうしたんです？」

「四葉が補導くらっとる。家にいるらしい。戻るぞ。」

乾ははいと言ってスコップを担ぎ軽自動車のトランクに入れmエンジンをつけた。

「多田さん。早く。」

多田は重たい体を揺らしながら車に乗り、自宅へと向かった。

「へへ。やっぱりやりましたね。アイツ。」

「まったく。他の警察の世話にはなるなよって言ってるのにあいつは。」

「まあ思春期ですしね。どうせまたそこらへんの不良を殴り倒したとかでしょ。無駄に強いですからね。誰かさんのせいで。」

乾は鼻をほじりながら言った。

「母親が死んだことであいつは一人になった。自分の身ぐらい守れるようにさせんといかんذار。だから拳法を教えたんだ。」

多田はムスツと腕を組んだ。

「それも今やケンカ殺法になっちゃってますけどね。着きましたよ。」

二人は車から出て警察と一緒にいる少年のほうへ向かった。

「どうもすいません。こいつの保護者の者です。」

「学校前の駐車場でケンカですよ。これで何回目ですか？もうあきれてきますよ。もう私達の手を煩わせないでください。では。」

「すいません。」

若い警察官は自転車に乗りささと消えていった。

「ふう。四葉、お前も今日から中学生だ。ちゃんと学校入って授業聞いてノート取ってテストを受けなきゃいかんぞ。いつまでもこんなことしてるようじゃ、、」

「うるせーよ。」

四葉は多田の言葉に重ねるように言った。

「お前。今まで養ってもらってきた人にその口の聞き方は何だ？」

「乾。いいんだ。」

前に体を乗り出す乾を、多田はさっと片手を出し止めた。

「じゃあ早く見つけてみるよ。事件の証拠を。」

四葉は乾にきりっと目をやった。

「知ってんだよ。昼まであの場所探してんの。服がそんなに汚れてたら分かるっつーの。」

四葉は地面に置いていた鞆を拾い上げ家に歩いていった。

「待て、四葉。」

多田が声をかけた。四葉は立ち止まった。

「確かに事件の捜査をして10年が経つ。だがな、俺はお前の為だけにやってるんじゃないか。」

「、、、だったらアレか。」

四葉が多田たちのほうに振り向いた。

「俺が殺した子供の親のためか、、、じゃあもし証拠が見つかったら俺は死刑だな。」

「四葉、お前、多田さんがどんな気持ちで捜査してきたか知ってるのか!？」

乾は多田の腕を振り払って前に出た。

「知らねーよ。隠して捜査してたのはお前らだろ。俺をこの家で育ててきたのも、俺がどっかに逃げない為なんだろ。」

すました口調で四葉は言った。

「お前ってやつは、、、」

怒りを露にする乾の肩に手をやり、多田が四葉の前に近づいた。

「、、、いいか四葉。俺がお前を監視する為じゃったらなあ、学校にも行かさんし、外出はできるだけさせないようにするし、拳法なんか教えん。俺はな、お前に一人前の大人になって普通の生活ぐらいできるようにさせたかったから家に引き取ったんじゃない。」

四葉はふんつと顔を斜めに落としている。

「俺には嫁も子供もない。お前にも親も誰もない。同じ境遇でいいじゃねえか。事件の証拠を見つけるのはワシら警察の意地とお前の無実を証明するためじゃ。わかったな。」

「、、ふん。」

四葉は遠くへ走っていった。

「いやあ、やっぱりすごいですわ。多田さん。あの四葉があんなに長く話し聞くことってまず無いですよ。」

乾は拍手しながらにんまりとした笑顔をつくった。

「あいつも可愛そうな子じゃ。お前もあまり責めんといたってくれ。、、よしっ。資料を見るぞ。」

多田がそう言って二人はいえの中へ入り、古い押入れから分厚い捜査資料を取り出した。二人は向かい合わせて椅子に座り、分厚く茶ばんだ捜査資料を読み始めた。

「2100年3月1日金曜日の午後六時頃、賀丘幼稚園の前で突如車が炎上。原因不明。運転手だった四葉の母が死亡。それからすぐに幼稚園で園児、先生を含む大量殺人が発見される。あたり一面血の海で全員が殺された。その中で唯一、四葉だけは助かった。原因不明。四葉は意識を失っていて、病院で目を覚ましたが、車が炎上してからの記憶が無いと証言。相当なショックを受けたと考えられる。容疑者が殺人に使用した刃物等は見つからず遺体の傷口からして刃物、又は殴打で殺害を行ったと思われる。」

「何回も読み倒しましたが、本当にわからないですね。」

乾は難しい顔をして頭を小指でポリポリかいている。

「ああ。容疑者の意図もわからんし、大量虐殺をして、四葉だけを残すというのがやや気にかかるのお。」

多田はふうと息をもらした。

「もし万が一四葉が犯人だったとしても意図がまったく無いですもんね。それに幼児だったアイツには人を殺す術が無い。」

「実にわからん。何もかもな。やはり新たな証拠を見つけるしかないんじゃない。」

二人は資料に目を通しては思考し、互いに仮説を立て、矛盾点を見つけてはまた仮説を立て続けた。

、、クアクアと鴨の鳴き声がする。この町の河川敷には鴨が生息していることで有名だ。

「事件事件って。もうどうでもいいっつの。」

四葉は舌打ちをして石をつま先で蹴飛ばした。昼ごろになりあたりは活気付いてきたように感じられる。

四葉が河川敷をぼうつとしながら歩いていると、向かい側から4、5人の服装を乱した学生が歩いてきている。四葉と同じ制服だ。「ちっ。」

四葉は必ずカラまされると踏んだ。

「おい。何ジロジロ見てんだよ。え？」

案の条そのグループは輪になって四葉を囲んだ。

「うるせーよ。やんのか？ かかってこいや。」

「ぶざけた野郎が。ぶっ殺してやる！」

4人中の3人が四葉に襲い掛かったが、四葉はさらりとかわし、一人ずつに腹一発、顔に二発のパンチを入れた。3人の不良はドサツと倒れたまま動かない。

「クソ雑魚が。おい。お前も速く来いよ。」

四葉は残った一人に向かって顔にパンチをくりだしたが、当たる寸前でよけられてしまった。

「お前結構つええじゃねえか。俺らレッドサイクロンに入らねえか？ 人を殴って遊んで、面白えぞ？」

金髪で前髪を全て逆立てた男がにやりと笑い言った。

「だれがお前らみたいな雑魚共とつるむか。クソが。」

四葉は吐き捨てるように言った。

「じゃあとことんゼルさまの強さを見せてやるよ。泣くんじゃねえ

ぞ？」

ゼルという男はファイティングポーズをとり四葉へ突進した。四葉はひらりとかわし腹に膝を打ち込んだ。

「へ。ガードしたぜ。まだまだこれからじゃあ！」

「こいや！雑魚があ！」

二人の怒声は河川敷に響き渡り、いつの間にか鴨の姿も見えなくなった。

人っ気のない河川敷に二人の少年の横たわる姿をオレンジ色の光が照らしていた。

「はあ。俺の、勝ちだ、。」

四葉はふらふらしながらうつ伏せに倒れているゼルに向かっていった。

「はあ、。なんだよお前。なんでこんな強えんだよ、。」

ゼルは顔を四葉の方に向けて言った。

「お前が弱えただけだよ。はあ、。はあ、。このクソ雑魚が。」

「くそ、、。」

四葉はゼルに背を向け河川敷から家へと向かった。

ふらふらで血だらけの状態で家に帰ると、多田が慌てて近寄ってきた。

「四葉！なんだその様は！？」

「、、いつものことじゃねーかよ。」

「お前もしかして負けてんじゃないだろうな？負けたのか？まけたらただじゃおかねえからな。」

「うるせーよ。怒鳴んなよ。負けてねーよ。」

「そうか。ならいい。しかし、えらいやられようだな。てこずったのか？」

多田はほっとしたような顔を見せた。

「、、まあな。普通よりできる奴って感じかな。学校が同じだったっぽい。」

「おおそうか。、、じゃあ、またそいつと会うことになるかも知れんな。それでもって、そこからの友好関係ができるかもしれない。四葉。分かり合えた友は大事にするんじゃないで。」

「、、ああ。わかったよ。」

すくなくともいいから良い友達を持て。多田が事あるごとに四葉に言う言葉だ。四葉は、多田の言葉には背を向けず、心得として受け入れていた。

「、、もう疲れたから寝るわ。」

そう言って四葉は二階に上がり床に着いた。

新撰組（前書き）

四葉が栄光学院に入学してはや半年が過ぎようとしていた。

新撰組

「、、、、。」

四葉は学校に行くようになったが、学校には友達はいない。また、四葉自身つくる気もなかった。時々話しかけてくる気さくな人もいたが、四葉は拒むように退けていた。行間の教室には話し声の独特なガヤが行き交う。

「、、うぜ。」

四葉は行間になるとこうして屋上に向かう。生徒の屋上への立ち入りは禁止されており、扉は施錠されているが、四葉は唯一屋上へ行ける道を知っていた。体育館の裏口から上へ伸びている階段を上がると、屋上へ行けるのだ。この日も四葉はいつものように体育館から裏口へ向かい屋上へ行こうとした。

「やめろっ！降りて来いって！」

男の声の怒鳴り声が屋上から空へと響き渡る。屋上の周囲を囲っているフェンスの向かう側に少年が一人立っていた。そしてその少年に向かって叫ぶもう一人の少年。

「なるほど。自殺か。」

四葉はこのシチュエーションからこう連想した。

「あいつは、小春田コハルダと仙崎センザキか。」

四葉は同じ学年の生徒の名前と顔だけは全て覚えている。

「あ、四葉。お前もあいつ説得するの手伝ってくれよ。ここから飛び降りて死ぬとか言ってるんだ。」

仙崎は眼鏡をクイツと上げながら言った。

「死にてえ奴は死んだらいいんじゃないやねえか。誰にも迷惑かけなかったら。」

「だめなんだ。学校で自殺なんかあったら今後の僕の進学にかかわるかもしれない。まして僕と同じクラスだし。」

小春田はフェンスを握り締め、足を小刻みに震わせながら目に涙を浮かべている。

「ったく。どういつもこいつもクズだな。」

四葉はため息をつき言った。

「ゝ、は？だれがクズだって？」

仙崎は急に表情が変わったかのように見えた。

「あいつもお前も大してかわらねえクズだって言ってるんだよ。俺もな。」

そう言って四葉は帰ろうと階段に向かった。

「おい、待て。」

仙崎は四葉の腕をグッと掴んだ。

「なんだよ気持ち悪いな。離せ。」

振り払おうとしたが何気に仙崎の力が強く解けない。

「今の言葉を撤回しろ。君や小春田や僕が同じクズだと？」

「ああ。おんなじ人間のクズだ。自分のために行動して他人のことを頭に入れていねえ。お前、他人のために何かしたことねえだろ？」

仙崎は怒りで顔を赤らめている。

「なんで他人の為に自分が頑張らなきゃいけないんだ。自分の為だけに頑張るのが普通じゃにのか。」

「はっ。そういう考えしてる間は、お前は俺らと一緒にクズ野郎だ。仲良くしようぜ。」

そう言って四葉は仙崎の肩をポンと叩いた。

「うおっ！」

その瞬間、仙崎は怒号と共に四葉の腕を握り締め、地面へ投げ倒した。

「いててて。力あるじゃねえかお前。やるか？」

四葉は落ちた肩を摩りながら言った。

「僕はこう見えても柔道、空手をやっていたんだ。さっきの言葉を撤回しろ！」

仙崎はファイティングポーズをとりだした。

「撤回撤回うるせえな！こうやクズ野郎！」

その言葉と共に仙崎は四葉に殴りかかった。しかし、四葉はそれを避け、横っ腹に蹴りを入れた。

仙崎は息をハッと吐きながらうずくまった。

「実戦経験が違うんだよクズ。悔しかったら勉強ばっかしてねえで鍛えやがれ。」

そう言って四葉は屋上を後にした。
そのとき。

「誰だ無断で屋上に入ってる奴らはあ！！」

ドアをバンと思い切り開け、10人ばかりの集団が入ってきた。

「、、なんだお前ら。」

四葉はズラッと並んでいる集団をにらんだ。

「あ、、。し、、新撰組、、。」

フェンス越しに小春田はガタガタと小刻みに震えだした。もはや自殺お試みたことも忘れているようだ。

「お前ら！ここが新撰組だけの領地だってしつてのことか！？あ！？」

「斉藤。静かにしろ。」

長い赤髪で長身の男をその男よりもさらに大きい男が止めた。

「お前たち。ここで何をしている。」

橙の髪の色をした大男が四葉たち三人に低い声で言った。

「うるせえ。お前に関係あるかよ。おい、仙崎。こいつらなんだ？」

「し、新撰組。あまりにも狂暴なため、この学校でのケンカや校則違反などの違法行為を許された集団だ。その名は他の学校にまで知れ渡っている。」

仙崎はクソオと言い四葉に蹴られた横腹をおさえている。

「ここは俺たち新撰組だけが許された場所だ。お前ら、ここに入ってしまった仕打ちはわかってるな？」

新撰組はゾロゾロと四葉たちに近寄ってきた。

「その仕打ちってのは何なんだよ。あ？」

四葉は集団の真ん中にいる大男の目の前まで歩み寄りにらみつけた。

「おい。口をつつしめ。お前はたしか四葉だな。」

「お前はなんなんだよ。」

二人とも片時も目を離さない。

「俺は新撰組を率いる近藤勇だ。お前らには仕打ちを受けてもらう。」

近藤のやれの合図と共に赤毛の男が前に出てきた。

「この斉藤一に任せてください！お前ら全員死刑だ！」

そう言って殴りかかってきた斉藤の拳を、四葉はガツと掴んだ。

「いいぜ。こいよ。お前らを死刑してやる。」

二人は取っ組み合い殴りあったが、斉藤の力があまりにも強く四葉は投げ飛ばされっぱなしの時間が続いた。

「はあ、はあ。なんだコイツ。マジで強え。」

「その程度の力でよく近藤さんにあんなデケェ口たたけたなあ。あ？」

斉藤は倒れている四葉の前まで寄っていった。

「お前はもう終わりだ。二度と学校へこれねえぐらいにまでボコボコにしてやる。」

そういった後に斉藤は拳を振り上げた。

「待て。斉藤。」

近藤が殴りかかろうとした斉藤を止めた。

「えっ、なんでですか？こいつ近藤さんにあんなこと言ってたんですよ！」

「お前はもう十分だ。あとは俺がやる。お前ら全員下に行ってくれ。」

近藤がそう言うのと他の新撰組は階段を降りていった。斉藤も苦い顔をしながら屋上を後にした。

「ど、そういうつもりだよ。まじで殺すつもりか？」

四葉は腫れ上がった目をなんとか開け近藤を見た。

「、、。」

近藤は四葉へゆっくりと近寄っていき、目の前でしゃがんだ。

「四葉。お前はあの四葉だな。」

「なんだよ。俺は四葉だ。」

「もう『龍』の力は使えるか？」

「、、は？なんだよそれ。なに言ってるんだ？」

「そうか。」

そう言って近藤はゆっくりと立ち上がった。

「おれはお前の過去の事件も多田さんも知っている。今回は免除してやる。もう新撰組には逆らうなよ。」

「おい、待てよ。なんでおっちゃんのこと知ってた？なんでお前がああ事件のこと知ってるんだよ。」

四葉の言葉に足を止め振り返った。

「昔に多田さんに世話になったことがあるあんな。そして俺はあの幼児全員殺人事件の協力もしたことがある。そのおかげでこの『力』がてに入った。」

「っえ？」

この話を聞いて仙崎は驚いた。

「じゃあな。これからここには入るなよ。」

そう言って近藤は階段をゆっくりと下りていった。

「まったく、わけわかんねえよ。なんだよいきなり殴りかかってきやがって、しかもおっちゃんのこと知ってて事件に協力したことがあるってどういうことなんだよ。」

四葉は頭をかきむしりつつムクツと立ち上がった。

「おい、四葉。」

仙崎が血相を変えた面持ちで呼び止めた。

「お前ってまさか十年前の幼稚園児殺人事件の、、」

「、、そうだよ。おれはあの幼稚園の園児でたった一人の生き残りだ。じゃあな。」

四葉は体のいたるところをさすりながら階段を下りていった。

「一人だと？、、どういうことだ？、、」

仙崎は急いで起き上がり走って教室まで戻った。

教室へ戻った仙崎はすぐさまある男のもとへ行った。

「仁。はあ、はあ、大変だ。」

「どうした仙崎。そんなに服汚れて息きらしして。」

仁は椅子にクールに座って本を読んでいる。

「はあ、四葉っているだろ？あの問題児の。あいつとさつき新撰組に絡まれたんだ。」

「なに？じゃあお前新撰組とやりあったのか？」

「いや、この傷は四葉にやられた。そんなことより、四葉があの園児殺人事件の生き残りだって言ってたんだ。」

仙崎は重い体を椅子に預けてふうと息を吐いた。

「まさか。あの事件で生き残ったのは俺らだけじゃなく、まさかあの問題児までもがそうだというのか。」

仁は長い前髪の奥にある鋭い目を眉間に寄せた。

「俺らがどれだけ調べても分からなかったことだ。だとすると、、」

仁は椅子から立ち窓のほうを向いた。

「俺たちの推理からはアイツが犯人になるぞ。」

「確かに。でもあり得ないだろ。あいつもあの頃は俺らと同じ幼稚園児で人を殺せるはずがない。」

「そうだ。普通の園児ならできるはずがない。仙崎。ほかにアイツ何か言っていなかったか？」

「近藤と四葉が話していたんだけど、龍の力は使えるかって言っていたな。」

仙崎の一言に仁はビクッと体を震わせた。

「、仙崎。俺は一回四葉に会ってみる。もうすぐ授業が始まる。席に着こう。」

二人は各々の席に座った。仁は机にひじを立て難しい顔をしている。「もしあいつなら完全に一致する。」

選ばれし三人（前書き）

仁にとって、最後の授業は今までで一番長く思えた。放課後、仁は四葉のもとへ速足で向かった。

選ばれし三人

「おい。」

仁は帰ろうとする四葉を呼び止めた。

「あ？なんだよ。」

「お前に話がある。ちょっと来てくれ。」

「話すならここでいいじゃないかよ。それともケンカか？新撰組に怒られんぞ。」

四葉はカカカと笑ってみせた。

「10年前のじけんについてのことだ。」

仁がそう言い放った瞬間、四葉の顔が変わった。

「なんで、お前まで。」

「いいから来い。向こうで話そう。」

二人は体育館のうらまで来た。辺りは木や草が生い茂り、卒業製作で作られた噴水が絶えず水を吐いている。

「お前はあの事件の生き残りなんだな。」

仁が唐突に言った。

「ああ。気づいたら俺以外が死んでた。あの光景だけ今でも覚えてるぜ。」

右下に目をやった。

「実はな、俺と仙崎もその事件の生き残りなんだ。」

「は？それはねえ！あるとき立ってるのは俺だけだったはずだ。」

「静かにしろ。聞かれたらどうするんだ。俺らはあのときの記憶が無い。倒れて気を失っていたらしい。何らかのショックを受けたんだろうなあ。でも体には傷ひとつなかった。二人ともな。」

「マジかよ。」

四葉は顔を右手で覆ってうつむいている。よほどショックだったのだろう。

「今日は何なんだよ。次から次へと昔のこと言いやがって。」

「ん？次から次って、仙崎のことか？」

「違えよ。新撰組の近藤だ。アイツも事件のことを知ってるって言うてた。」

「え？本当か？」

「ああ。俺はあるとき親も亡くした。そのあと警察の多田っていうおっちゃんに面倒見てもらってたんだけど、アイツはその多田のおっちゃんとも面識があるって言うてた。あの事件に『協力』してたとも言ってたなあ。」

「情報量が多すぎる。お前はあるとき両親共になくしたのか。」

四葉は頭をポリポリ掻きながらいいやと言った。

「親父は物心ついたところからいなかった。お母さんだけが無くなった。覚えてねえけど。」

四葉はしゃがみこんで雑草をちぎっては投げている。

「つまり、全員死んだと報道されたあの事件で俺たち三人はあの幼稚園に同じ学年でいた。そして同じ中学に通い、今こうやって話している。さらに近藤までもがこの事件を知っている。」

「なんて偶然だろうなあ。」

四葉は物思いにふけた様子でちぎった草を投げている。

「何で生かしたんだろうなあ。俺らだけ。あとの全部無くしやがって。」

「四葉。一つ提案がある。」

仁はしゃがんでいる四葉の前に立った。

「なんだよ？」

「俺と仙崎でお前が住んでいる家に行く。そしてその多田って人にこのことを聞いてみる。警察なら何か知ってるかもしれない。」

「、、どうだろうな。」

どうしてという仁の言葉にはあとため息をついた。

「多田はあの事件を10年前に担当していたんだ。そっから今もこ個人で捜査してる。」

「そうなのか？ならなおさら聞いてみるしかないな。今日の夜八時に校門前に集合だ。仙崎にはあれから言うておく。」

仁はじゃあなと言っただ速足で帰っていった。四葉は返事もせず、ただ空を仰いだ。一面の青に点々と白い鳥が色味をつけるようにコントラストをかけては視界から消えていった。

「、、八時か。」

そう言っただ四葉は重い腰を上げ、学校を出て行った。四葉は個人的にも事件の捜査を何度もした。しかし一つも手がかりが得られなかった。ずっと停滞していた事件がいきなりの進展をみせていることに不安や好奇心が入り混じり、四葉は困惑していたのだ。これまで味わったことの無い感情におどらされるまま、行くあての無い道を歩んでいった。

午後八時。昼間の部活動の掛け声などは一切無く。車やバイクのエンジン音だけがすりぬけていく。

四葉が校門に着いた頃には既に二人がいた。

「よし。行くぞ。」

仁はジャージのこすれる音を出しながら、好奇心からか目がギラギラしている。

「まず何で三人も生き残っていたことを隠していたのかを聞こう。さすがに何か喋るはずだ。」

仙崎はジーパンから携帯電話を取り出し時計を見た。

「できるだけ早くしよう。勉強する時間がなくなるからね。」

「ああ。できるだけ早く終わらせる。後でいくらでも聞けるからな。」

「四葉の家までの間、四葉は一言もしゃべらなかつた。」

「着いたぞ。ここだ。」

四葉が多田たちと暮らしている家の前に着いた。四葉はドアのぶに手をかけグイッとまわした。

「多田。いるか。」

「おう、四葉。どうした？」

椅子に座り、テレビをみて新聞を読んでいる多田がいた。

「ちょっと話があるこら外に来てくれ。」

多田は新聞をお机に置き外へ出た。

「どうした？ともだち連れて。」

「、、。」

四葉は黙っている。すると仁が口を開いた。

「10年前の幼児全員殺人事件について聞きたいのですが。」

そう言った途端、多田の顔色がこわばった。

「どうしてそれを。四葉が話したのか。」

「いえ。僕たち二人もあの事件の生き残りだからです。」

多田は一瞬驚きの表情を見せたが、すぐに平常心に戻った。

「なにを言ってるんだ。そんなこと言いに来る時間があったら勉強しなさい。」

「僕らはあの事件があった幼稚園の園児であり、あの事件の生き残りだ。」

仁は多田の言葉にかぶせる勢いで言った。

「でも警察は俺に自分だけが生き残ったとしか言われなかつた。ほかの二人も同じだ。」

多田はもはや黙ることしかできなかった。

「、、あの事件はお前らガキを巻き込むわけにはいかんじゃ。だからできるだけ情報を隠すように警察が動いたんじゃないよ。わかつたか、つり目の少年。」

「巻き込むわけにはいかない理由があるんですよね。何で俺らを巻

き込めないんです？」

多田は切れるような仁の言葉に絶句している。

「このことは言えん！もう終わっていることじゃ！いまさら何をやっても遅いわい。」

「その割にはまだ事件の調査をしてるんでしょ？」

「ぐっ、なぜそれを。」

ただは四葉が話したと推測して四葉のほうを見た。

「、、おっちゃん。もう俺もいっぱいいいだ。ちゃんと話してくれよ。」

多田は初めて見る四葉の雰囲気にとつとした。

「、、わかった。中に入れ。」

四人は家の中へ入っていった。この部屋に四人はなかなか狭い。

「あの事件にはなにか大きな組織がかかわっているんじゃない。なにかはわかつとらんが、あんな大量虐殺できる一般人はいない。むしろはそう踏んでこれまで表から裏までの組織を調査してきたが何も情報は得られなかった。犯人像も浮かばないんじゃない。つまり迷宮入り。警察の間でもこの事件はタブーになっているほどじゃ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7422v/>

クローバー

2011年10月7日08時20分発行